

『自分に語り掛ける声』(使徒の働き 9章 1-9節) 2023.10.8.

<はじめに> 驚くべき出来事や奇跡的な助けを得られた信仰者の体験談に、かつて懂れていたことを思い起こします。そして、そのような出来事も経験もない自分を大したことのない者のように思っていました。劇的な迫害者サウロの回心は、私にとって遠く掛け離れたものなののでしょうか。

I 天からの光と声(1-9)

①息巻くサウロ(1-2)

ステパノの殺害を発端に、サウロはイエスを信じる者たちを捕え、逃れようとした者たちはエルサレムから諸地方に逃げ出します(8:1-3)。息巻く彼は、エルサレムから離散した者たちさえ見過ごさずに捕えようと、大祭司から権限を受けてダマスコへと北に向かいます。

②突然の光と声に(3-9)

サウロがダマスコに近づいたとき、突然天からの光に照らされて彼は倒れ、「サウロ、サウロ、なぜ…」と語り掛ける声を聞き、同行者たちも戸惑います。彼らは視力を失ったサウロの手を引いてダマスコ市街に入り、彼は三日間、目が見えず、飲食もできずにいました。

③天的な干渉

この天からの光と声のように、世にも不思議な出来事に出くわすことがあります。私たちの生きる世界には全能者である神がおられ、すべてを治め、関わっておられる証拠です。もはやサウロの憤りを止める手段は人の世にない中、神が彼に立ちほだかられたのです。

II 彼は目が見えず

①自ら思うままに

ステパノ殺害から始まる一連の迫害は、サウロが見聞きし、考え、主導したものです。自らの意志と判断の礎は、これまで彼が受けて来た教育と研鑽です(22:2-3)。彼はモーセの律法を厳格に守り行い、誰よりも神に対して熱心な者だと自負していました(ガラ 1:14)。

②目が閉ざされる時

視覚から得る情報は多く、それに基づき私たちは判断・行動しています。しかし、先行きが見通せない状況に追い込まれると、私たちは途方に暮れ、誰か支え導いてくれることを切望します。自ら見えないなら、より周囲に頼らざるを得なくなります。

③見えない者が見えるように

天からの光は神の栄光の輝きです。その輝きに人は圧倒され、自ら見える、と自負することも無力と化します。しかし、それは自分の光に頼ることから離れ、自分に語り掛ける声に耳を傾けるきっかけともなります。ヨハネ 9:39-41 でイエスもこの逆説を語られています。

III 自分に語り掛ける声

①サウロに語り掛ける声(4-5)

声の主はサウロを名で呼び、「なぜわたしを迫害するのか」と問われます。迫害は信者に向けてでしたから、「どなたですか」と問い直します。その声の主であるイエスだと分かると、彼は愕然とします。自分は神のためにして来たことが、実は神に敵対していたからです。

②責めるのではなく、気付かせるため(6)

熱心さと無知から、大いなる過ちと罪を犯していた彼をイエスは責め立て咎めることなく、むしろここから立ち上がり、なすべきことがあると告げられます。この経験が、罪が赦され、新しく造り変えられるイエスの福音を彼が力強く宣べ伝える確信と根拠となりました。

③信仰は聞くことから始まる(ロマ 10:17)

著しい天からの光と声は私たちに与えられなくても、日々心に語り掛ける御声が響いています。聖書を読み聞かすときに、祈りと思い巡らしのうちに、主は繁く語られています。それに耳を傾け、主と語り交わり、主の御声に従う者のうちに、信仰は育まれます。

<おわりに> サウロが主であるイエスの御声に耳を傾け、信頼するようになるために、神は格別な計らいで彼を扱われました。しかし、彼のような天的干渉を私たちが望むべきではありません。日々あらゆる方法で語られる主に耳を傾け、聞き従う者を、主は喜ばれます。(H.M.)